

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 9 日現在

機関番号：32309

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26463465

研究課題名(和文) 臨床現場で育まれたケアメソッドを活用した老年病院における現行教育プログラムの構築

研究課題名(英文) Reconstruction of Educational Program make the use of the Original Care-Methods at the Clinical Scene of the Geriatric Hospital

研究代表者

伊藤 まゆみ (ITO, MAYUMI)

群馬パース大学・保健科学部・教授

研究者番号：50251137

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：老年病院の看護師がもつ看護の困難性と臨床現場で育まれてきた熟練看護師のもつケアメソッドの明確化の課題から、高齢者のエンドオブライフケア、重度認知症高齢者に対するコミュニケーション技術を明らかにすることを目的とした。

については中堅看護師、看護管理者の2グループを対象にフォーカスグループインタビューを実施した結果、死をとらえる時期についてエビデンスにない変化や直観、ことばで訴えられない苦痛や思いの理解、固定概念にとらわれないケアが独自のメソッドとして示された。については熟練看護師2名及び新人看護師2名のケア場面を参加観察した結果、4つの特徴的技術と技術の同時活用が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this paper is to make clear two unique care-methods that are being practiced there. One is a practice about the end of life-cares. Another is to clarify communication skills of serious demented patient. Researchers carried out focus-group-interviews. As a result, 1) newly the nurse's intuition about the time of being conscious of the death that is cultivated from the elderly person's condition change. 2) the nurse's understanding about the elderly person pains and feelings that the languages can't convey the meanings. 3) original care-methods that don't adhere to fixed ideas. And as to the latter, researchers, as a method of this research, carried out the participant observation of a setting of care-scene that expert nurses and advanced beginners are existing. Researchers discovered characteristic skills and that these skills are being practiced at the same time.

研究分野：医歯薬学

 キーワード：老年看護 熟練看護師 ケアメソッド 現行教育プログラム エンドオブライフケア 認知症高齢者
コミュニケーション技術

1. 研究開始当初の背景

少子高齢社会を迎えた現在、加齢に伴う心身の障害を持ちケアを受ける高齢者の増加と、そのケア内容・質の向上が社会的な課題となっている。

今や病院に入院する患者の7割を65歳以上の高齢者が占めている。さらに平均寿命の伸延に伴い、認知症高齢者は462万人、その予備軍400万人と推計され、入院し治療・看護を受ける高齢者の多くが旋毛の発症を含め、認知機能の問題を顕在的・潜在的有しているといえる。

一般病院における入院期間の短縮化が進むなかで、在宅や施設での生活に移行するためのリハビリテーション機能、医療依存度の高い要介護高齢者・終末期患者のケアを主として担っているのが療養病床である。そこでは患者の意思決定と尊厳を尊重しつつ、可能な限り生活機能を維持・回復すること、治療とのバランスをとりながら、死に至るプロセスを安らかにたどれるような看護が展開されている。

介護保険制度の整備により、療養病床を有するいわゆる老年病院では、寝たきり状態や重度の認知症を合併する患者が多く入院する。

日常生活全般に援助を要する、あるいはコミュニケーションによる意思疎通が困難な高齢患者の療養生活を支える専門性の高いケアメソッドについての報告は少ない。しかし筆者はこれまで、日常のケア経験を通して、臨床現場で育まれてきた臨床実践知ともいえるケアメソッドが存在していると考えてきた。

そしてそのケアメソッドを臨床知識として抽出し、看護職の現任教育に活用することは老年看護の発展においてきわめて重要かつ必要性の高い試みであると考えた。

2. 研究の目的

(1) 老年病院で働く看護師が、日常の看護実践を通して考える看護の困難性とケアメソッドの課題を、クリニカル・ラダー別に明らかにする。

(2) 1で明らかになった課題のうち、「看護実践能力」の項目と内容を抽出する。

(3) 抽出された「看護実践能力」について、項目ごとに卓越した能力を有すると考えられる看護師が、これまで育んできたケアメソッドを明らかにする。

(4) ケアメソッド別の課題に沿って、明らかにされたケアメソッドを活用した現任教育プログラムを再構築する。

3. 研究の方法

(1) ステップ1

療養病床を有する老年病院1施設で高齢者の終末期ケアに携わった臨床経験5年以上の看護師4名を対象に、半構造的インタビューを実施した。

インタビュー内容はICレコーダに録音。逐語録を作成し、データを質的・帰納的に分析した。

(2) ステップ2

前年度課題から、「高齢者のエンドオブライフケアの実際とケアに携わる看護師の思い」について、中堅看護師グループ6名、看護管理者グループ6名を対象に、2グループでフォーカスグループインタビューを実施した。

インタビュー内容はICレコーダに録音。逐語録を作成し、質的・帰納的に分析し、カテゴリー化を行った。

(3) ステップ3

熟練看護師の持つ重度認知症高齢者に対するコミュニケーション技術の特性の抽出と、これまで明らかにしてきた実践知をふまえ、臨床現場で育まれたケアメソッドを活用した現任教育プログラムの検討を行った。

については熟練看護師2名と新人看護師2名が、各2名の同じ認知症高齢者にかかわった看護ケア場面の参加観察を行い、抽出したコミュニケーション技術の出現回数、複数の技術項目を同時に活用する回数を熟練看護師と新人看護師で比較した。

4. 研究成果

(1) ステップ1から

インタビューデータから14の中カテゴリー、5の大カテゴリーに集約された。

5つのカテゴリーとは、「最後までその人らしく生きることを支える」「自己のケアに価値を見出しながらより良い終末期ケアを目指す」「生きる意味をめぐる葛藤や精神的負担にとらわれ苦悩する」「看護師として経験を積むことで精神的負担に対する対処能力を身につける」「高齢者終末期における療養病床のケアの特徴」であった。

看護師はいかなる状態であろうと、生命が存続する限り、ひとりの人としてその人らしく生を全うできるよう支援する一方で、「生きる意味」をめぐる葛藤や精神的負担にとらわれ苦悩していた。

しかし臨床経験を積むことで精神的負担に対する対処能力を一層身につけていた。

(2) ステップ2から

フォーカスグループインタビューの結果、

長期ケアの場合である療養病床では、エンドオブライフをとらえる時期について、エビデンスにない微弱な変化や経験から培った直感があることが確認された。

看護の実際では、高齢者がことばで訴えられない苦痛や思いを理解し、より安楽な援助の工夫や普段と変わりなくとも過ごすケアが特徴であった。

看護師は家族に近い感情を持ち、患者の家族としての思いと看護師としての思いの間に葛藤があり、家族の視点を生かした幅広いケアを担っていることが示された。

(3) ステップ3から

コミュニケーション技術の項目として、「看護師を認知することを促す技術」「患者にプラスの印象を与える技術」「ケアを継続するための技術」「自尊感情を高めるための技術」の4項目に整理された。

これらのコミュニケーション技術の出現回数は、熟練看護師43.5回に対し新人看護師は15.2回であった。複数のコミュニケーション技術を同時に活用している回数は、熟練看護師14.7回に対し新人看護師2.7回であった。

についてはこれまで抽出してきた熟練看護師のエンドオブライフケア、重度認知症高齢者に対するコミュニケーション技術のケアメソッドを教材として活用しながら、卒後研修プログラムを臨床ラダーにそって再構築を試みた。

(4) 今後の課題

今後は再構築したプログラムの実践と評価を行うとともに、これら以外の臨床現場で育まれたケア技術の項目をさらに焦点化し、その内容の言語化、教材化を試みる研究を継続的に実践していく。

ケア技術の項目としては、高齢者の自己決定を支援し、終末期ケアに活用すること、摂食・嚥下と食事に関すること、脆弱な高齢者の皮膚を外刺激から守る安全のためのケア、活動性が制限された寝たきり高齢者の安楽や心地よさを測定する指標を用いたケアの実践と評価などである。

これらの成果により、熟練看護師が臨床実践で育ててきたケアメソッドが、新人看護師、後輩看護師に効果的に伝えられ、死が真じかにある高齢者に対する看護実践の質のレベルがさらに向上することで、高齢者が安らかな日々を過ごし、人生の最終末期における高齢者とその家族の自己肯定感や満足感が高まることが期待されるのではないだろうか。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 2件)

東泉 貴子、関 妙子、伊藤 まゆみ、認知症高齢者に対する熟練看護師のコミュニケーション技術の特性に関する研究、第48回日本看護学会(慢性期看護)、2017.9.1(開催予定)、神戸ポートピアホテル(兵庫県)

根生 とき子、松谷 信枝、加藤 積良、関 妙子、伊藤 まゆみ、療養病床入院中に経口摂取が可能となった高齢者の援助セイコ魚分析から得られた実践知、第48回日本看護学会(慢性期看護)、2017.9.1(開催予定)、神戸ポートピアホテル(兵庫県)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 まゆみ (ITO, Mayumi)
群馬パーサ大学・保健科学部・教授
研究者番号: 50251137

(2) 研究分担者

星野 泰栄 (HOSHINO, Yasue)
群馬パーサ大学・保健科学部・講師
研究者番号: 90398529

井本 由希子 (IMOTO, Yukiko)
群馬パーサ大学・保健科学部・助教
研究者番号: 80604462

(3) 研究協力者

根生 とき子 (NEOI, Tokiko)
群馬パーサ大学・保健科学部・教授
研究者番号: 30745584

関 妙子 (SEKI, Taeko)
医療法人ほたか会ほたか病院・看護部長

青柳 直樹 (AOYAGI, Naoki)
医療法人ほたか会ほたか病院・看護科長